

中・高校生の学校適応感と信頼感との関係

筑波大学大学院(博)心理学研究科 天貝 由美子

筑波大学心理学系 杉原 一昭

The relationship between school adjustment and trust of junior and senior high school students

Yumiko Amagai and Kazuaki Sugihara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The present study investigates the relationship between school adjustment and a sense of trust, to understand their implications for the development of an effective support to enrich a fruitful cycle of teacher-student counseling relationships. Junior high school students ($n=160$) and senior high school students ($n=285$) completed the school adjustment scale (Naitou et al., 1987) and the trust scale (Amagai, 1995). The main results were as follows: (a) The effect of school level (junior vs. senior) was significant in total school adjustment, dimensions of learning, school activities and future directions. Gender differences were significant in dimensions of school activities, future directions and friend-teacher relationships. (b) The correlations between trust and school adjustment were significant in junior and senior high school students. For junior high school students, trust correlated mainly with interpersonal dimensions of school adjustment, such as friend-teacher relationships. For high school students, on the other hand, trust correlated with interpersonal and also intrapersonal dimensions of school adjustment, such as future directions. These results suggest a possible change in the role of trust from junior to senior high school students. The cycle model for the development of trust-school adjustment was proposed.

Key words: school adjustment, trust, junior high school students, high school students, development.

問 題

文部省の報告によると、小・中・高等学校での生徒の不登校者の数は過去最大に達している。また、学校内でのいじめ等を発端とする自殺も多発しており、これらの現状に対し、国や地方の各自治体では、スクールカウンセラーの設置を推進するなどの緊急の対策を行っている。

このように、生徒が学校に対し満たされなさを感じるかまた個人なりの充実感を持つかを左右する大きな要因の一つは、学校やクラスへの生徒自身の適応感であろう。適応は、一般的に“人と環境が調和した良い関係にある状態”と定義される(e.g. 福島、

1989)。しかし、適応感を規定するのは客観的な環境というよりむしろ、環境と自分との主観的な関係であると考えられる(谷井・上地, 1994)。つまり、適応感は“個人が自己をよい適応の状態にあると意識していること(加藤・石川・田中・落合・高木・堀, 1981)”ととらえられる。これまでに、この生徒の適応感に影響を与える要因については、多くの研究がなされてきている。例えば、谷井・上地(1994)は学校適応感と親役割との関係を調べ、親の子どもに対する「受容」と「適応援助」が彼らの適応感に有意に影響を及ぼすことを示した。

ここで、生徒自身の、人や自分自身に対する信頼感も、彼らの学校環境への適応感を左右することが

考えられる。これまでに、信頼感は、ストレスのあるライフイベントの認知を肯定的に修正する機能を持つと考えられ (Schill, Toves & Ramanaiah, 1980), 他者からのサポートを求める態度と結びつくこと (Grace & Schil, 1986) など、個人の適応的な特質との関連が示されている。また、信頼感は生涯に渡って Self-Esteem に肯定的な影響を及ぼす (天貝, 1996b) など、カウンセリングでの目指す人間像や精神的健康とも密接に結びついていると考えられる。加えて、中・高校生における信頼感は、彼らの最も身近な他者である友人・教師・家族との心理的距離と相互的に関連することも示されている (天貝, 1996a)。このように、中・高校生を取り囲む実際の対人資源の重要性が指摘される一方で、それらを含むより包括的な個人の適応感と信頼感との関連については、まだ検討されていない。

そこで本研究では、生徒の学校環境における適応感と信頼感との関係を発達的に検討する。具体的には、(a) 学校適応感の各側面について、学校段階差および性差が見られるかどうかを検討する、(b) 学校適応感と信頼感の関連およびその発達的变化を検討する。以上により、中・高校生に対する効果的な発達援助サイクルの一端を明らかにすることが本研究の目的である。

方法

被調査者 茨城県公立中学校2年生160名(男子78名, 女子82名, 平均年齢13.49歳, SD=.50), 同公立普通高等学校2年生285名(男子195名, 女子90名, 平均年齢16.48歳, SD=.53)。

調査時期 1995年10-11月。

調査内容 (a) 信頼感尺度 (天貝, 1995): 24項目, 6件法, 自分への信頼・他人への信頼・不信の3下位尺度からなる, (b) 学校環境適応感尺度 (内藤・浅川・高瀬・古川・小泉, 1987): 30項目, 4件法, 学習意欲・友人関係・教師関係・特別活動への態度・規則への態度・進路意識の6下位尺度からなる, 本研究では尺度の内容をよりわかりやすくするため, 各側面を順に, 適応の「学習面」「友人面」「教師面」「特別活動面」「規則面」「進路面」として記述した。各尺度の項目例をTable 1に示す。

なお, 調査は, 授業時間内に集団形態で実施された。回答は, ソシオメトリックテストを行った高校1校を除き, 原則として無記名であった。

Table 1 使用した尺度の項目例

信頼感尺度
<p><自分への信頼> 私は、自分がある程度は信頼できる。 私は、自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。</p> <p><他人への信頼> これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた。 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。</p> <p><不信> 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。 所詮、周りは敵ばかりだと感じる。</p>
学校環境適応感尺度
<p><学習面> 勉強に積極的である。 勉強の目的を持って努力している。</p> <p><特別活動面> クラブ、ホームルーム活動や行事などに積極的である。 クラブ、ホールルーム活動や行動が楽しい。</p> <p><規則面> 意識しなくても、規則を守れる方だ。 学校の規則を真面目に守っている。</p> <p><進路面> 進路のことを真剣に考えている。 進路目標は明確である。</p> <p><友人面> 楽しい友人関係を持っている。 多くの友人を持っている。</p> <p><教師面> 何でも相談できる先生がいる。 先生と話す機会を持つようとしている。</p>

結果

学校適応感の学校段階差および性差 学校適応感全体およびその各側面毎に、学校段階差および性差が見られるかどうかを、分散分析によって検討した。その結果 (Table 2), まず, 学校適応感の全体得点では, 学校段階差 ($F(1,412) = 12.94, p < .01$) および性差 ($F(1,412) = 13.51, p < .01$) の両方が見られ,

Table 2 学校適応感の平均および標準偏差と分散分析結果

	中学生		高校生		分散分析結果		
	男子	女子	男子	女子	学校段階差	性差	交互作用
適応感 (全体得点)	84.15 (19.66)	87.44 (14.32)	75.97 (16.22)	84.01 (15.30)	12.94** (中>高)	13.51** (男<女)	1.96
学習面	12.45 (3.63)	12.07 (3.30)	10.45 (3.52)	10.82 (3.47)	19.58** (中>高)	.411	.783
特別活動面	13.56 (3.84)	14.22 (3.10)	9.69 (3.56)	10.74 (3.55)	109.91** (中>高)	6.55* (男<女)	.302
規則面	14.19 (4.25)	13.60 (3.82)	13.11 (4.33)	13.19 (4.12)	3.52+	.190	.630
進路面	14.52 (4.45)	15.11 (5.05)	14.84 (4.49)	17.16 (4.56)	5.79* (中<高)	12.19** (男<女)	3.61+
友人面	16.67 (4.43)	19.25 (3.59)	16.06 (4.20)	18.30 (3.78)	3.11+	32.92** (男<女)	.482
教師面	13.35 (4.21)	13.20 (3.44)	11.89 (3.69)	13.63 (4.22)	1.30	8.13** (男<女)	5.66*

(** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$)

高校生よりも中学生の方が、また男子よりも女子の方が得点が高かった。

次に、学校適応感の各側面毎にみると、学習面では学校段階差 ($F(1,412) = 19.58, p < .01$) が見られ、高校生よりも中学生の方が得点が高かった。特別活動面では学校段階差 ($F(1,444) = 109.91, p < .01$) および性差 ($F(1,444) = 6.55, p < .05$) が見られ、高校生よりも中学生の方が、また男子よりも女子の方が得点が高かった。進路面では学校段階差 ($F(1,412) = 5.79, p < .05$) および性差 ($F(1,412) = 12.19, p < .01$) が見られ、中学生よりも高校生の方が、また男子よりも女子の方が得点が高かった。友人面では性差 ($F(1,412) = 32.92, p < .01$) が見られ、男子よりも女子の方が得点が高かった。教師面では性差 ($F(1,412) = 8.13, p < .01$) および交互作用 ($F(1,412) = 5.66, p < .05$) が見られ、中学生においては女子よりも男子の方が得点が高く、高校生においては男子よりも女子の方が得点が高かった。また、有意傾向のみられた箇所をあげると、規則面では学校段階差 ($F(1,451) = 3.52, p < .1$) で、高校生よりも中学生の方が得点が高い傾向があった。友人面でも学校段階差 ($F(1,412) = 3.11, p < .1$) の有意傾向がみられ、高校生よりも中学生の方が得点が高い傾向があった。進路面での交互作用の有意傾向 ($F(1,412) = 3.61, p < .1$) もみられた。

学校適応感と信頼感の関係およびその発達の変化
信頼感と学校適応感の関係を検討するために、学校段階および性別に両者の相関係数を調べた。その結果 (Table 3)、まず、信頼感と学校適応感 (全体) との相関であるが、中学生女子において不信との関連が見られなかったのを除き、いずれにおいても学校適応感と自分への信頼・他人への信頼との間には .32以上の正の相関が、不信との間には負の相関が見られた。

次に、信頼感の3側面と学校適応感との相関係数を求めた。その結果を概観すると、学習面では、中・高校生ともに、女子では自分への信頼と他人への信頼が同程度に適応感と正の相関を示したのに対し、男子では自分への信頼との方が強い相関を示した。特別活動面では、男女ともに、中学生では自分および他人への信頼と同様に不信とも相関が見られたが、高校生になると不信と特別活動面での適応感の間にはあまり関連がみられなくなった。規則面では、中・高校生ともに、男子では信頼感と関連が見られたが、女子では男子に比べてかなり弱い関連しか見られなかった。進路面では、中学生においては女子よりも男子の方が適応感と関連を示したのに対し、高校生になると反対に女子の方が特に自分への信頼と中程度の正の相関を示すようになった。友人面では、中学生女子において、不信と友人面での適

Table 3 信頼感と学校適応感との関係

	中学生						高校生					
	男子			女子			男子			女子		
	自分への信頼	他人への信頼	不信	自分への信頼	他人への信頼	不信	自分への信頼	他人への信頼	不信	自分への信頼	他人への信頼	不信
適応感 (全体得点)	.327**	.360**	-.347**	.487**	.387**	-.136	.469**	.422**	-.125+	.489**	.537**	-.274**
学習面	.262*	.167+	-.101	.296**	.288**	-.241*	.332**	.177**	-.021	.250**	.267**	-.110
特別活動面	.433**	.503**	-.266*	.363**	.362**	-.355**	.322**	.307**	-.081	.216*	.408**	-.173+
規則面	.211*	.378**	-.375**	.132	.253*	-.134	.195**	.121*	-.141*	.139+	.145+	-.226*
進路面	.327**	.360**	-.216*	.226*	.057	-.149+	.393**	.269**	.052	.421**	.217*	-.072
友人面	.450**	.593**	-.403**	.457**	.356**	-.055	.456**	.573**	-.200**	.378**	.558**	-.396**
教師面	.329**	.433**	-.255*	.429**	.327**	-.139	.260**	.258**	-.052	.290**	.421**	-.088

(** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$)

応感に有意な関連がみられなかったのを除いては、中・高校生ともに信頼感3側面との間に中程度の相関が見られた。教師面では、自分および他人への信頼とは中学および高校を通じ正の相関が見られたが、不信とは中学生でのみ関連がみられた。

考 察

学校適応感の発達と性差について 学校適応感には、全体的にみて、高校生よりも中学生の方が高く、特に学習面・特別活動面においてその傾向が強かった。これは、高校では中学校に比べ、学習内容の高度化および細分化がなされること、また特別活動としてのホームルームやクラブへの参加が多く、選択肢の一つとなることなどから、高校生になると相対的にこれらへの充足感が減少すると考えられる。しかし一方で、高校生では、進路面での適応感の増加がみられ、この結果は特に女子において顕著であった。これは、進路の選択の幅が広がる高校生の方が、また男子と比較すると平均就職年齢の低い女子の方が、この時期に明確に自己の将来を意識するようになり、そのことに対しての自分なりの充足感が生ずるためであると考えられよう。

また、学校適応感には男女差が見られ、学校適応感全体および特別活動面・進路面・友人面・教師面において、男子よりも女子の方が適応感が高かった。この友人や教師に対する女子の適応感の高さは、従来の研究で一般的に指摘されている女子の対人関係に関する肯定的感情の高さを支持する結果であった。

信頼感と学校適応感の関係について 今回の結果から、信頼感と学校への適応感には中・高校生ともに正の関連があることが明らかになった。また、信頼感には、従来指摘されてきた友人や教師との対人関係面だけでなく、学習面や特別活動面および進路面という個人的な側面でも同様の関連が見られた。天貝(1996a)によると、信頼感と身近な他者との心理的距離との関係は中学生から高校生になると弱まること示されている。しかし、今回取り上げた学校適応感においては、高校生になるにつれての信頼感との関連の弱まりは示されず、むしろ、進路面においては適応感と信頼感の関連が強まるという結果であった。これは、中学生において信頼感には主に友人や教師といった対人的関係性を通じて自己存在を位置づける役割を果たすのに対し、高校生においての信頼感には進路選択といった自己決定場面での適応感や安全感として機能するようになることを示すとも考えられる。Fig. 1は、今回の結果をもとに作成された、中・高校生の信頼感および適応感の関係の発達モデルである。このように、中学生から高校生になるにつれて、信頼感には、主に友人や教師との実際のやり取りを中心とした対人面での適応感との関連から、進路意識といったより自己の内面的な適応感との関連へ移行していくことが考えられる。

今後は、信頼感に影響を与える要因をさらに詳細に検討すると共に、発達の望ましい信頼感の形成のされ方についても、検討することが必要であろう。

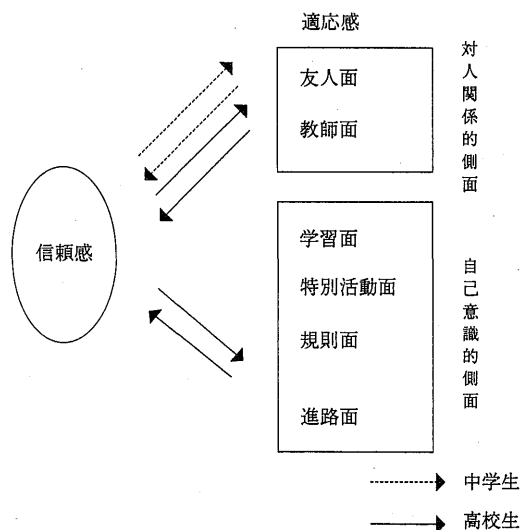


Fig. 1 信頼感と学校適応感との関係の発達(案)

要約

本研究は、中・高校生において学校での適応感と信頼感との関係を検討することにより、教師-生徒間のカウンセリングでの効果的な発達援助への示唆を得ることを目的とした。中学生160名、高校生285名が信頼感尺度および学校適応感尺度に回答した。主な結果は以下の通りである：(a)学校適応感について、学校段階および性を2要因とする分散分析を行ったところ、学習面・特別活動面・進路面で学校段階差が、特別活動面・進路面・友人面・教師面で男女差がみられた。(b)中学生・高校生の両方において、信頼感と学校適応感との間に有意な関連がみられた。中学生では信頼感は対人面での適応感と強く関連していたのに対し、高校生においてはそれに加え、進路面など対自面での適応感とも強く関連するようになった。これらの結果から、信頼感の役割の変化が考察され、信頼感と学校適応感の発達サイクルが検討された。

付記

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました中学校および高等学校の先生方および生徒の皆さんに深く感謝いたします。

引用文献

天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
 天貝由美子 1996a 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究(印刷中)
 天貝由美子 1996b Self-Esteemに影響を及ぼす要因としての信頼感—その生涯発達の変化—(未発表)
 福島章 1989 性格と適応 本明寛他編 性格心理学新講座3—適応と不適応— 金子書房 Pp.3-37.
 Grace, G. D. & Schill, T. 1986 Social support and coping style differences in subjects high and low in interpersonal trust. *Psychological Reports*, 59, 584-586.
 加藤隆勝・石川透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀啓造 1981 現代青少年の人間関係と適応感(1) 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 566.
 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-146.
 Schill, T., Toves, C. & Ramanaiah, N. 1980 Interpersonal trust and coping with stress. *Psychological Reports*, 47, 1192.
 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.

—1996. 9. 30 受稿—